

「多様性の包摂」という方向性より

誰もが楽しく 共に学べる体育授業へ

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会
体育・保健体育、健康、安全ワーキンググループ（第5回）
2025年12月18日（木）

細川江利子（埼玉大学）

多様性の包摂について（確認）

次期学習指導要領に向けた基本的な考え方①

教育課程企画特別部会「論点整理（案）」p.3より

○改訂論議を貫く三つの方向性

生涯にわたって主体的に学び続け、多様な他者と協働しながら、
自らの人生の舵取りをすることができる、民主的で持続可能な社会の創り手を「みんな」で育むため、
次の三つの方向性を踏まえて議論を行う。

①「主体的・対話的で深い学びの実装」（Excellence）

②**多様性の包摂**（Equity）

③実現可能性の確保（Feasibility）

⇒（端的に表現すると）

「**多様な子供たちの『深い学び』**を確かなものに」

○**多様性の包摂**は、多様な個性や特性、背景を有する子供が多くなっている実態に向き合うとともに、
こうした多様性を個人及び社会の力に変える視点から、一人一人の意欲が高まり、可能性が開花し、
個性が輝く教育の実現を目指すものであり、第一の方向性（上記①）と両立させることが不可欠な第二の方向性である。
⇒**個人と社会のウェルビーイング、共生社会の実現へ。**

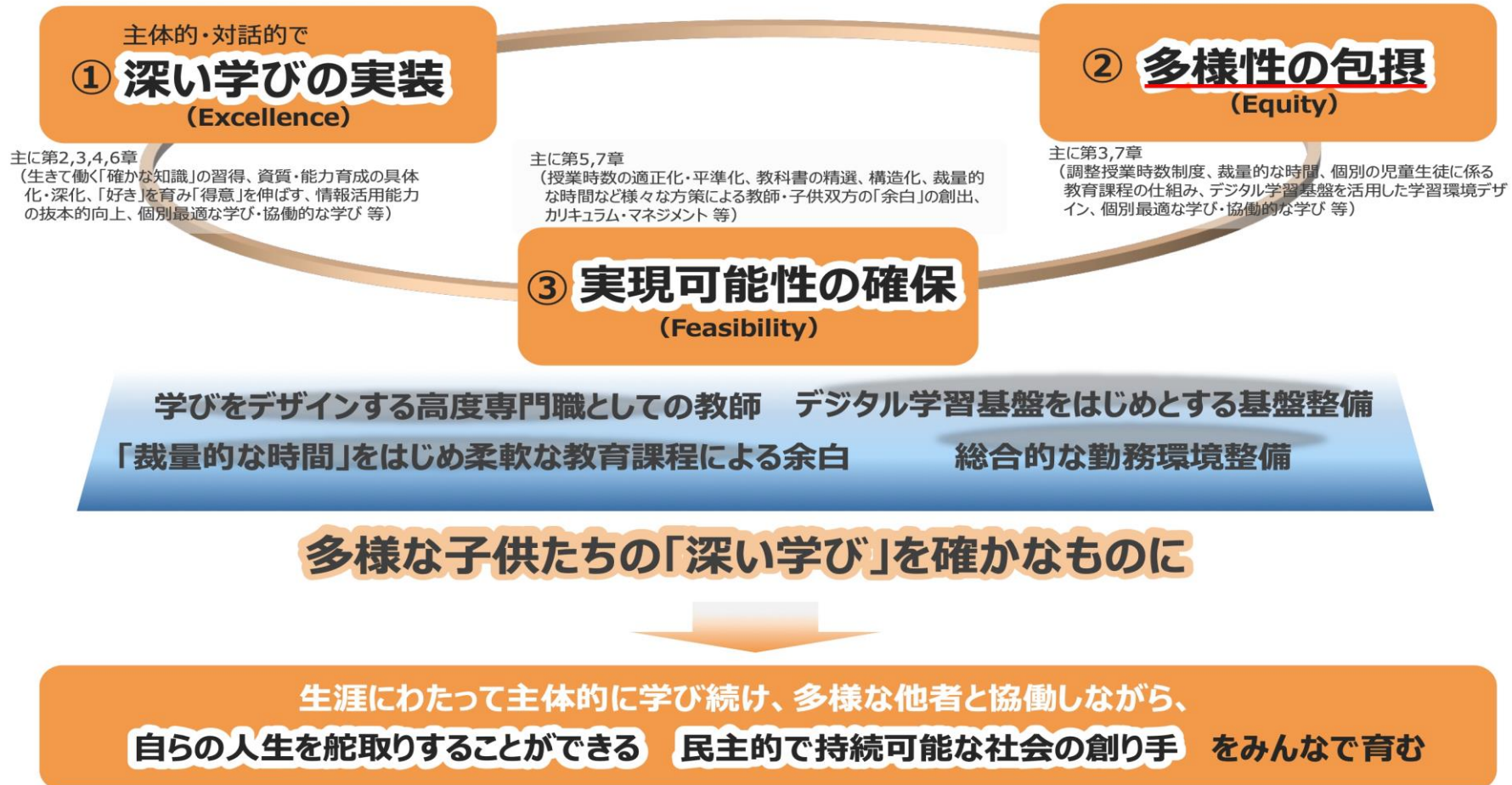
多様性の包摂について（確認）

次期学習指導要領に向けた検討の基盤となる考え方

～あらゆる方策を活用し、三位一体で具現化～

補足イメージ 1 - ①

教育課程企画特別部会
「論点整理（案）」 p.5



多様性の包摂について（確認）

○ワーキンググループによる検討事項・論点（抜粋）

ワーキンググループにおける検討事項等（参考資料） p.3より

教育課程企画特別部会の議論を踏まえた検討事項

- 1.体育科・保健体育科を通じて育成する資質・能力のあり方・示し方
- 2.体育科・保健体育科の指導と評価の改善・充実のあり方

3.誰一人取り残さず 資質・能力を育む柔軟な教育課程のあり方

- 義務教育における調整授業時数制限や、高等学校における科目の柔軟な組み替えを可能とする仕組みを前提とした場合に、考えられる教育課程・学習指導の工夫のあり方
- 教育課程の柔軟化に伴って生じうる課題とそれを防ぐための運用のあり方

現行の学習指導要領では。。。

○各運動領域の知識及び技能：「**運動が苦手な児童**への配慮の例」（小学校）

○指導計画作成上の配慮事項：

- ・ **障害のある児童（生徒）** などについては、学習活動を行う場合に生じる困難さに応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的、組織的に行うこと。（小中高）

○内容の取り扱い：

- ・ 学校や地域の実態に考慮するとともに、個々の児童の運動経験や技能の程度などに応じた指導や児童自らが運動の課題の解決を目指す活動を行えるよう工夫すること。特に、**運動を苦手と感じている児童や、運動に意欲的に取り組まない児童**への指導を工夫するとともに、**障害のある児童**などへの指導の際には、周りの児童が様々な特性を尊重するよう指導すること。（小学校）
- ・ **体力や技能の程度、性別や障害の有無等**にかかわらず、運動の多様な楽しみ方を共有することができるよう（社会で実践することができるよう）留意すること（中学校・高校）

（解説）・仲間とともに楽しむための活動の方法や修正の仕方を見付けたり、違いに配慮して状況に応じた行動をしたりしようとするなど、「思・判・表」「学・人」との関連を図ることが大切である。（中高）

・原則として男女共習。 ・学習集団のよりよい雰囲気づくりが大切である。（以上、高校）

指導の工夫とともに、仲間の特性や違いを認め共に活動できる態度の育成が大切

「学びに向かう力、人間性等」において学ぶ 「共生」

「学びに向かう力、人間性等」

各領域の共通の事項：愛好的態度、健康・安全

取り上げることが効果的な領域に重点化：公正（伝統的な行動の仕方）、協力、責任、参画、**共生**

○体づくり運動 中1・2 「一人一人の違いに応じた動きなどを認めようとする」

中3～高 「一人一人の違いに応じた動きなどを大切にしようとする」

○器械運動・陸上競技・水泳・武道

中1・2 「一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めようとする」

中3～高 「一人一人の違いに応じた課題や挑戦を大切にしようとする」

○球技 中1・2 「一人一人の違いに応じたプレイなどを認めようとする」

中3～高 「一人一人の違いに応じたプレイなどを大切にしようとする」

○ダンス 中1・2 「一人一人の違いに応じた表現や役割を認めようとする」

中3～高 「一人一人の違いに応じた表現や役割を大切にしようとする」

実践例：障害のある子供とない子供が共に作品を創り発表した活動 ～作品《キャンディ・レイン》～

映像『みんなのダンスフィールド』1998（西洋子他）より

- メンバー：初めて出会った小学生6名（男子2、女子4/障害のある子3、ない子3）。
- 指導者：表現・創作ダンス等身体表現の教育研究を専門とする大学教員。
- 活動内容：子供たちが自分たちでアイデアを出し合いオリジナルな物語を作りながら創作。
プロローグとエピローグだけ決めて、あとは自由に体で表現。
練習が終わるごとに、自分達で反省する点や次の課題についての意見交換。
発表会で作品を発表。（通常の小学校の表現の授業と同じ流れ）



作品《キャンディ・レイン》の流れ -1-

①作品内容についての朗読（子供たちが担当）

舞台はとある外国の町。ここに一軒の家がありました。子供はママから大好きなキャンディをもらいました。

ママは言いました。「このキャンディは明日まで食べちゃダメよ。大事に取っておきなさい。」

それを聞くと、子供はキャンディを自分の一番大切なものを入れておく箱に入れておきました。

しかし、夜になって、子供がキャンディがちゃんとあるか確かめようと箱を開けてみると、キャンディが無いのです。

子供は大慌てで家中探しましたが見つかりません。町に探しに出てみると、なんと世界中のキャンディがなくなっており、他の子供たちも探していました。僕たちのダンスはここから始まります。



作品《キャンディ・レイン》の流れ -2-

②いろいろな所にキャンディを探しに行く

遊園地：いろいろな乗り物が勝手に動き出す



動物園：みんながウサギや蛇に変身。



探し疲れた女の子のところに、
親子鳥が「森へ」と告げて去っていく。



作品《キャンディ・レイン》の流れ -3-

③そこで、女の子は勇気を出して暗い森に入っていく。

やっと一つ目のキャンディを見つけた時、目の前には空まで続く大きな木が。



④メンバー以外の障害のある子もない子も

キャンディを持って登場。作品を盛り上げてラストへ。



「もっと続けたい」 ー発表後の活動の広がり

指導者へのインタビューより(2018.01.19社会福祉法人トット基金アーツサポ東京)

- この活動は、指導者向け教材ビデオ制作のために、作品を創るプロジェクトとして実施。
- 初めは、**お互いの違いにどう対応したら良いのかわからなかった**子供たちは、それぞれの体で自由に表現する体験を共有しました。
- （終了後）6人が真剣な顔で私の前に現れて、「**この活動をもっと続けたい**」と訴えたのです。
みなで対等に、一緒に体を動かして作品を創る楽しさを、障害のある子もない子も知ってしまったのです。⇒そうして始まったのが「みんなのダンスフィールド」（月に1度から）という活動。
- 次第に子供が増えてくると、面白いことに気づきました。最初の6人は、障害のある子もない子もそれぞれに、一緒に身体表現をすることの心理的葛藤を乗り越えてきていたのですが、すでに**一緒の世界ができている**ところに入ってきた子供たちは、車椅子があるとかないとか、障害があるとかないとか、年が違うとかは全く無頓着で、**その世界にごく自然に溶け込むことができる**のです。
これがあるべき姿だと感じました。社会全体がそうなると良いと思いました。
- その後、送迎役で活動を見学していた母親、さらに父親も**皆、一緒に**活動しています。

この実践例より、わかること・気づくこと

- ・ まずは一緒に活動してみることが大切。
- ・ ルールや決まり、競争のない表現系ダンスでは、障害の有無に関わらず、（共に）活動しやすい。
 - * Dance for All を目指してきた歴史。 * 実際に多くの実践がなされている。
- ・ 話し合い（創作）の場でも、作品（演技）の中でも、誰でも活躍でき、誰でも主役になれる。
 - * その場にいる多様な個性を持つ仲間と共に自由に生み出す活動は、まさに主体的、対話的で深い学び。
- ・ 一人一人の体（心も）の多様性は、能力の差ではなく、個性になり、活かし合うことができる。
 - * 多様な方が表現の幅が広がり面白い。差ではなく、違い（よさ、個性）。
- ・ サポートし合い共に踊る中で、息が合っていき、互いの違いを身体を通じて感じることもできる。
- ・ 「みんな違って、みんないい」 = アイデアや、表現する動きは自由であるということ。
- ・ どのような動きや表現にも共通する「良い動き」はある。それは障害の有無には関係ない。

表現系ダンスの指導の特徴（リズム系も含めた創造型ダンスに共通）

- ・ 良いところ（踊っていること、動きや表現の良いところ、他の人と違うところ）をまず**ほめる**。
- ・ 「できる」ところから、**より良くするにはどうすれば良いか**という視点でアドバイス（指導）する。
- ・ （決まったゴールに向かわせるのではなく）自由な発想を認め、子供から動きや表現を**引き出す**。
 - * 指導者の言葉：「出会った人たちをどのように受け入れて、どのようにしたらみんな楽しめるか」
「ここでの活動は何が出るかわからない卵を割っている感じ」
- ・ 一人一人の**良さ（個性）を認める**。
 - * その動きはおかしい。変だと言ってしまった時点で授業は壊れる。本当に一人ひとりを認めているか。
 - * 男子は～、女子は～などの思い込みは捨てる。

⇒ 他領域にも活かせるところがあるのではないか。

多様性の包摂という視点を大切にしたいこれからの体育の授業に向けて（現時点での私見）

○まずは共に活動する機会をもつ。そこから生まれることを大切にしたい。

知らないことが1番の壁。幼少時から、共に活動することが当たり前になるように。

○多様な子供たちが共に活動しやすい領域から、まず始めてみる。⇒他領域に展開。

○技能を問わず、全学年必修の「体ほぐしの運動」を活かしてはどうか。

＊「共生」（も含めた「学びに向かう力、人間性等」）の視点をこれまで以上に大切に。

＊指導のねらいを明確にした上で、新しい種目（ボッチャ、シットイングバレーなど）やその要素を参考にした活動の導入。

＊他クラス、異学年交流の機会を。

○一人一人の好き・得意の発見へ。得意な児童生徒を伸ばすことも忘れずに。

多様性の包摂という視点を大切にしたいこれからの体育の授業に向けて（現時点での私見）

○高等学校における選択制の授業を工夫する。（文部科学省『学校体育実技指導資料』参照）

- * 自分の選んだ領域（内容）について、自分たちで活動を工夫し、企画運営できるような授業を設定。
- * 卒業後に、自分が運動についてどのように「する」「みる」「支える」という多様な形で関わっていくかをイメージできるように。

○学校内だけでなく、可能な範囲で他校（種）の児童生徒や、地域の団体（障害のある人、高齢者なども含む）との運動を通じた交流の場を設ける。

- * 今、ここにいるメンバーでいかに楽しんで活動できるかを工夫して活動することを体験的に学ぶ。
- * 生涯スポーツとしての活動の様子を知る。⇒共生社会の実現、生涯スポーツの実践へ

○教員の意識を変えていく。

- * （競技）スポーツのイメージ（考え方）からの脱却。 ⇒生涯スポーツにつながるように。多様性の包摂を可能にするように。
- * 一定基準での「できる・できない」や競争（勝ち負け）にこだわりすぎず、
一人一人の「できる」ことからスタートする、そして「新たに（より良く）できる」を可能にする授業の工夫。
結果（だけ）ではなく、プロセスにある運動の楽しさを味わわせる、それに気がつかせる。
- * 一人一人の良さ（個性）を知り、認める。思い込みを無くす。
例：男子はどこでも着替えられる。みんな持久走は嫌い。男子はダイナミックな表現、女子は繊細な表現が得意。
- * 工夫した授業を行なっても、意識が変わらなければ、教師の一言で授業は壊れるので注意。
例：跳び箱運動の、自分の課題にあった技を工夫された場を選んで練習させる場面「○跳びができない人は、△でもいいよ」。